

桂川連理柵

かつらがわれんりのしがらみ

〔解 説〕安永五年（一七七六）十月大阪北堀江座初演、菅宣助作。上の巻は、石部の宿と信濃屋、下の巻は、六角堂と帯屋。帯屋の後の「道行隴桂川」は、宮園節から原曲を生かして増補された。

当時、京都の桂川で死体で発見された長右衛門とお半の事件に基づいて書かれた世話物。この事件にはさまざまの説があり、心中と見せかけて殺害されたともいわれている。浄瑠璃では、中年の長右衛門と隣家の十四歳の娘お半が、心中に追い込まれる過程を描いており、正宗の刀のすりかえ事件を加え、時代味を持たせている。

〔あらすじ〕長右衛門は、子どものころ京都の帯屋・繁齋の養子となり、お絹という妻がいる。繁齋は今は隠居の身だが、儀兵衛という連れ子のいるおとせを後妻としていた。

〔上の巻〕信濃屋のお半は、伊勢参宮の帰りに、隣の帯屋の長右衛門と出会い、石部の宿に泊まりあわせる。お半は、お供に連れている丁稚の長吉に言い寄られて、長右衛門の部屋に逃げ込み蒲団にもぐり込むが、それが間違いのものとなる。かねてから、お半に思いを寄せていた長吉は、これに腹を立て長右衛門が預かってきた正宗の刀を偽物とすり替えてしまう。

信濃屋では、お半とお絹の弟才次郎の縁談がすすむ。祝いにきた長右衛門に、お半は身重になったことを話す。

〔下の巻〕お絹は夫婦円満を願って六角堂でお百度を踏んでいた。そこへ現れた儀兵衛は、お半から長右衛門へあてた手紙を見せ、渡す代わりに言うことをきけと迫る。うまく言いくるめて儀兵衛を追い払ったところへ長吉が通りかかる。お絹は長吉から石部での様子を聞くが、後は自分に任せて、お半とねんごろな仲だと言い張るように頼み、連れ立って帰る。

〔長右衛門は、旅の途中、お絹の弟才次郎と恋人雪野に会う。雪野が売られることを知った長右衛門は、いま預かってきた為替金百両を渡し、二人を救う。〕

〔帯屋の段〕おとせは長右衛門を追い出して、儀兵衛に帯屋を継がせたいと考えており、百両は長右衛門が盗んだと責める。また、合鍵を使って五十両を盗み出し、その罪を長右衛門にきせようとした。さらに、儀兵衛は、お半から長右衛門にあてた手紙を読み、不義を暴く。お絹は手紙の宛先は長吉だと言って、その場を切り抜ける。紛失した金の件で、おとせたちがなおも長右衛門を責めるのを見かねた繁齊は、二人をたしなめる。長右衛門はお絹に、金は雪野の身請金に使ったとうちあけ、お半とのいきさつも話し詫びる。長右衛門が休んでいるところに、お半が忍んで来る。長右衛門は追いついたものの、気になって門口へ出たところで書き置きをみつけ、急いでお半の後を追う。お半はひそかに死を覚悟し、桂川へ向かっていた。

〔道行籠桂川〕二人はともに桂川まで来たものの、長右衛門はお半にこの世に残るようにいう。お半一人残っても人様の笑い者になるだけなので、一緒に死んで欲しいと頼む。二人は手に手をたずさえ、桂川へと身を投げていった。

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。

帯屋の段

上り行く。

柳の馬場を押小路、軒を並べし呉服店、現金商ひ

掛硯、虎石町の西側に、主は帯屋長右衛門、井筒

に帯の暖簾も、掛値如才も内儀のお絹、気の取り苦

しい姑に、目を貫はじと襷掛け、洗濯物を引き伸し

の、皺は寄つても頑丈作り。母のおとせは勝手を出

で、

「朝飯の箸下に置くと駆け出した長右衛門。もう昼

過ぎたに戻らぬは、ア、また川東で飲み据ゑてゐる

のである。お絹、ちつと言はしれぬかいの」

「イエイエ、遠州の殿様から請取りの脇差、研屋か

ら来るとそのまゝ、蔵屋敷へ持つて参られました」

「サイノ、脇差の研が出来ましたと持つて往くばか

りにかう隙が入つて、内の見廻しが出来るものかいの。ア、同じ事でも弟の儀兵衛めは、モ痒い所へ

手の往く様に精出しをるに、兄のぬるまに困つた」

と、継子を憎み実の子を、持て囃したる鼻口。聞

き兼ねて隠居繁斎、数珠爪ぐつて奥より出で、

「ア、お婆聞きづらい。死なれた隣の治兵衛殿が、

五つになるまで育てられた長右衛門、無理に貫ふて

家の根継ぎ。死んだ先の女房は、隣への義理がある

と、荒い詞も遣はなんだに、長右衛門成人以後、後

妻に直つた身をもつて、連れ子の儀兵衛ばかりを

大事に掛け、兄が事といふとがみがみ、がみがみ、

ちと嗜みやれ。コレ嫁女、気に懸けてたもんな」

と、女房にかはる仏性、

「オ、その結構を見込んでの、身代をさゝほうさ

にする長右衛門、随分と可愛がらしやれ。ア、やか

ましやのやかましやの、やかましやの。コレお絹、
隠居へ連れて往て昼寝なとさしてたもれ」

と、負けてみぬ口逆らふは、後生の邪魔と繁齋は、
裏の隠居へ嫁引連れ、往くと戻ると一時に、儀兵衛
はとつかは内に入り。

「ア、コレ母者人、聞かしやれ、一昨日おととい兄貴が取り
に往た為替の百両、まだ金を見ぬ故、合点が往かぬ
と飛脚屋へ往て問ふたれば、『一昨日長右衛門殿に
渡した』と為替手形を出して見せた。すりや為替の
百両は兄貴が宙でくすねたに極まつた」

「オ、さうであるともく、戻りをつたら吟味し
て、親父殿への面当て、ぐつといがめてよい楽しみ。
ヤコレ儀兵衛、ま一つよい事はなう、昨日上つた浜
松の五十両も、金戸棚の合鍵して、ア、コ、コレ見
や、ちよろり盗んで置いたは、金の要るわが身に遣

りたさ。為替の金をくすねたからは、これも兄めに
塗り付ける」

「出来た」

「コレ儀兵衛、大きな声しやんな」

「オツ、ハ、ハ、ハ、ハ、ヤコレ母者人、この五十両は
の、コレ、かう、かう」

と囁く弟、兄長右衛門は棒鞘ぼうびやの、一腰々に差し詰ま
る、難儀を何と投げ首し、しをしを帰るわが家の内。

見るより母は、やぐわん声、

「五町か十町ある屋敷に、半日の上かゝつて、内の
事は何になる。朝から芸子やおやま狂ひも、あんま
り張ちやうでぎんざう」

と、喚わめくは隠居の耳へ筒抜け、

「又鬼婆がしやら声は、長右衛門が戻つたか」
と、お絹を連れて親繁齋、

「さつきにも言ふて聞かずに、長右衛門さへ見りや
噛み付く様に、近所の手前もちと思やれ。長右衛門
もひだるかる。ソレお絹、早う飯をおましや」

「イ、ヤ、飯どころぢやないぞ、問はにやならぬ事
がある。コリヤ長右衛門、一昨日取りに往た為替の
百両、ドレ、金見やう、こゝへ出せ」

と言はれて吐胸とむねの長右衛門、

「イヤ、折角参つたれど、先の亭主が折節留守。金
は、明日請取る約束」

「ア、コレ兄貴、コレ／＼／＼／＼兄貴、ぬけぬけ
／＼／＼と嘘を言はしやんないなう嘘を。おりやた
つた今先へ往たれば、『金はこなたに渡した』と為
替手形を出して見せた。それでもこなた請取らぬか」

「エ、それは」

「アノ、金は明日の約束で、先へ手形はやるまいが

の兄貴、先へ手形はやるまいがの兄貴」

「ア、コレ儀兵衛、儀兵衛、詮議にや及ばぬ。もう
川東へ飛んだぢやある。昨日上つた五十両も心許な
い。サア、こゝへ出して見せい」

「あつ」

と言ふより長右衛門、巾着の鍵こてこてと、金戸棚
の引き出し開け、

「ヤア、五十両の金がない、どうした事」
と驚く夫、お絹もびつくり繁翁も、共に驚く呆れ顔。

「オ、盗人ただけしい。錠の下りたこの戸棚
鍵持つた者が出さいで、誰が取るぞいやい。ハア、
これもお盗み遊ばしたのぢやな、オ、あつぱれな
家の根継ぎぢや、オ、根継ぎぢや／＼、イヤイヤ
イヤお根継ぎ様ぢやホ、／＼。親父殿、安堵であ
ろ、嫁女、さぞ嬉しかるなう」

「ヤアヤア、そりやまあ大それた不義淫奔^{いたずら}。兄弟同然といひ、恩ある家の小娘を唆し、嫁入りの邪魔をおのれマア、ようしたなア。コレ親父殿、なんどがみがみ言ふが無理か、水晶輪の様な儀兵衛、鼻頂口でござるかや」

と、悪は悪でも当座の理詰め、長右衛門は身に冷汗、親繁齋も胸迫り、

「長右衛門、エ、情けない事してくれたな。色は心の外とは言へど、あんまり凶のない取り合ひで、おりや世間へ顔が出されぬ。嫁女の里へもどの面下げ、どう挨拶の仕様があらう。指差されぬ帯屋の家、暖簾に泥をよう塗つた」

と、初めて聞いた親の恨み、胸に釘打つ長右衛門、面目涙に暮れゐたる。お絹は舅の傍に寄り、

「モ一途にお聞きなされては、お腹の立つは尤もな

れど、長右衛門様に不義はない。ありや相手が違ひました」

「ア、コ、コ、コレお絹さんお絹さん、さりとはサリトテハ、今読んだをどう聞かしやつた。まだその上にコレ『長様参る』、へ、貧乏ゆるぎもならぬわいの」

「サイナ、その『長様』がきつい間違ひ」

「エ、間違ひ、間違ひ間違ひてどう間違えましたえ」

「サア、お半さんの色の相手は、内の子飼ひの、長吉ぢやわいな」

「エ、長吉、長吉々々てアノ何かえ、丹波から来てゐるアノ洩^{はな}垂れの長吉ですかえ、あの洩長、あの洩長、プツ、アハ、ハ、ハ、ハ、ハ。お絹さん、じやらじやらとハ、ハ、ハ、あいつはお前、明けの元朝から暮

れの大晦日まで漬ばつかり垂れてまつせへ、

あんな物捕まえてお半さんの色の相手、プツ、

ハ、ハ、ハ、あほらしもない。イヤイヤ、お前はんと

こゝで競り合ふより、隣へ往て長吉呼んで来て、あ

いつに聞いたら知れることぢや、マ、待つとくんな

はれや、ハ、ハ、ハ、今呼んで来ますハ、ハ、ハ、あほら

しいハ、ハ、ハ、アイタ、仕様もない事言ひなはるによつ

て道歩かりやせんがな。いかにわが夫の悪名が晴ら

したいとて、長吉、ハ、ハ、ハ、ハ、マどうぞ長吉が家

にゐてくれればよいが。へい、今日は結構なお天気

でございます。隣の帯屋の儀兵衛でございます。長

吉がをりましたら、ちよつとお貸しなされて下さり

ませ。直に、お返し致します。オ、ぬよるぬよる

ハ、ハ、ハ、オ、イ長吉、ちよちよちよちよちよちよ

と来てくれ、ちよちよちよちよちよちよと来てくれ、

ちよつと〜」

と門口から、どやけば隣の内より長吉疾しや遅しと

走り来る、儀兵衛は落着く、『エヘン』布袋なり。

「儀兵衛さん、なんの用ぢすえ」

「オ、長吉、ハ、ハ、ハ、よう来てくれた、よう来てく

れたハ、ハ、ハ、マ、その漬から片付けその漬から片付

けへハ、ハ、ハ、ハ、この顔で、ホ、ホ、ホ、阿呆あほらし

うて物言はりやせんがなハ、ハ、ハ、ハ、」

「何ぢやいな儀兵衛はん、人が内に用事してゐるも

のを、今来いやれ来いと呼びに来て、人の顔見て笑

ふてばつかり、フンお許しぢやな、おりやもう去ん

でこ」

「ア、コリヤ待て待て待つてくれ待つてくれエ

へ、へ、へ、阿呆でもちよつこと理屈を言ひよるがな

ハ、ハ、ハ、ハ、イヤ済まなんだ、済まなんだ。ホンニ

われの言ふとほりわれを呼び出してわれの顔見て
笑ふてばつかり、すまん、サもう笑やせんで、俺も
帯屋の儀兵衛ぢや、笑はんと言ふたら笑やせんで。

アノナ、他のことでもないが、われとそちのお半さ
んと懇ろしてゐるといやい。サ、覚えがないとさつ
ぱりと言ふてしまえ、ヨウ、ヨ」

「ア、コレ長吉どん、こゝぢや合点か。サ、覚えの
ある事言ふたがよい」

とお絹が目交ぜ、呑込む長吉、

「エ、何どすかいな、あの伊勢参りのことどすか、
ハアアノ、それはあの何ぢやわいな、それはあの何
ぢやわいな、それがあのそれがあの」

「何ぢやい、それがあのそれがあのと、早う言はん
かい」

「そないに喧しい言ひないな、アノそれは何ぢやが

な、皆様の手前もちつくりちつと面目ないが、あの、
伊勢参りの戻りにナア、石部の宿屋でナア」

「わりや見たか」

「イヤアノ、それがあの、ちつくりちつと面目ない
が、お半さんとナ、みょうじと女夫事」

「なんぢや分かりやせんがな。モ一遍言ふてくれ、
言ふてくれ」

「ア、恥かしいな、あのな、お半さんとな、わたい
とな、女夫事。アイ、懇ろしてゐますからは、お半
さんはわたいが女房」

「ヤイヤイヤイ、そりや何を吐かしやがるのぢやい。
コリヤこの状に『長様参るお半より』」

「儀兵衛様、しちくどい。コレ、その『長様参る』
はな、内の子飼ひのこの長吉よ」

「エイ、テモマ芸気のない奴」

と、儀兵衛は頭掻きむしる。

「申し母様、現在恋の本人が出たからは、夫に不義はござりませぬぞえ」

「ハテそりやモウしよ事がないわ。ガ為替の百両と五十両はどうしたぞ。サア長右衛門、白状せい」

「申し母者人、いかにも百両の金は私が悪遣ひなれども、五十両の金は存じませぬ。こりやどこぞに合鍵した盗人めが」

「あるなら出せ。その盗人は誰ぢや、鍵を持ってつかつてゐて、盗人は外にある。フム何か、コリヤアノ白川様から釣り取る様な儀兵衛や、如来様見る様なこの母に、塗り付けうと思ふのか。盗人の子やら乞食の子やら、知れぬ棄子のおのれとは違ふぞよ。素姓正しいこちら親子に、科を着せうとするアノコ、ナ横道者めが。サア五十両の行方を言へ、言は

ぬか、言はぬか。言はぬとかうぢや」

と棕櫚箒、振上げてりうりうりう、肩腰分けず打ち据ゑる、

「こりやあんまり」

と駆け寄るお絹、箒をしつかと動かせず、

「エ、お前はお前はお前は、お前はナア」

「なんとした」

「なんとしたとは、胴欲ぢや胴欲ぢや、胴欲ぢやわいなあ。いかに胤腹分けぬとて、さう惨らしうはせぬものぢやわいな。言はぬが礼儀孝行なれど、お前方の氏素性も、あんまりあやは抜けぬぞえ。サア言ひませうか、言はふか」

と、腹立つ俣の捨て詞、真面目になつた母息子、長右衛門は女房を引き退け、

「コリヤ、母に向うて慮外な悪口」

「それでもお前」

「ハテ、言ひやまぬか」

「何言はしやんす、礼儀も人によるわいなア。なんぼ結構にあしらうても、噛み分けのある母様ぢやない。エ、わしや腹が立つ、腹が立つ腹が立つ」

と、身を震はしたる無念泣き、心根不憫と引寄せて、
「道理ぢや道理ぢや、ガ親ぢやわやい親ぢやわやい、親といふ字で何事も、虫を死なす胸の中。思ひ遣つてくれ、女房」

と、拳を握り男泣き。

「オ、それぞれ、親ぢやぞ、親ぢやぞ。親に向かふて何を不足、コリヤ儀兵衛、ちつと代はつて箒の役、擲きのめして金の行方を」

「オツと合点」

と棕櫚箒、振上ぐる手をぐつと捻ぢ上げ、

「イヤわれにはよう擲かれまい。見事兄をわりや撲つか」

「イ、ヤ、弟が撲つのぢやないぞ。おれが名代にどつかしてどつかして、金の白状さするのぢや」

「イヤ、白状も杀瓜へちまもゐらぬぞ。兄に指でも差しをつたら、この繁翁がおのれらを、ぼいまくるぞ」

「コレ親父殿、金を盗んだ長右衛門、ナ、なんでこなた鬮肩するのぢや」

「ソ、それが大戯だわけの親玉とやらぢやわやい。長右衛門はこの家の主、百五十両が千両でも、わが物をわが遣はうが、また撒き散らさうが心次第それを盗んだと詮議立て、阿呆臭いわい。づけづけ物を吐ぬかしたら、昔の飯焚お竹に追ひ下げ。長右衛門女夫が草履直さし、親子共に撲ちのめさせて責め使はずぞ」

と、道を立てたる父親の、情けに女夫は有り難涙、
親子は脹ふくれる焼き餅顔。

「ア、儀兵衛、くたびれたの。台所で一杯せうかい」

「オ、それがよござんしよ。コリヤ長吉、失せお
れ。おのれにや大分せりふがある」

と、弱みを見せぬ親と子が、跡に引添ひ出来合ひの、
壺を被つた色事仕、打連れ

道行臙桂川

白玉か、何ぞと人の咎めなば、露と答へて消えなまし物を思ひの恋衣、それは昔の芥川。これは桂の川水に、浮き名を流すうたかたの、泡と消え行く信濃屋の、お半を背な長右衛門、逢瀬そぐはぬ仇枕、結ぶ帯屋の軒も早、今宵限りに月影の、流れにつれて行く身には、妻にも名残り押小路、哀れは後に遠ざかる、町を離れて漸々と、背なやうやうをおろしてとりどりに、姿つくらふ心根は、まだ娘氣の跡や先、死に、行く身は骨よりも、心細道、犬の声

「アレ壬生寺の鐘の数、九ツこゝに北南、東寺の塔や朱雀野の、火影かすかに三筋町」

身に沁む風に誘はれて、

「コレお半、こゝが三条愛宕道、露の命の置き所、

草葉の上と思へども、道々も言ふ通り、俺こそ死なねばならぬ身の上。四十近い身をもつて、十四やこちらの小娘と、一緒に死んだら義理知らずと、世間の人の笑ひの種、親御の恨みお絹が思惑、とかくそなたはながらへて、亡きわが跡を弔ふてたも。頼む」とばかり言ひ残す、袖は涙のにはたずみ。お半涙のつゆちり程も、

「お前の無理ぢやあるまいけれど、わたしや嫌いな、そんなその様な、胴欲な、年もいかいで恥かしい。この腹帯はどうせうえ。殿御を先へながらへて身二つになり、大胆ないたづら者ぢや悪性な、不心中なと人さんの笑はんしても大事ないか。そりや可愛ひのぢやない、憎いのぢや。小さい時からお前をまわし、祇園参りや北野さん、物見見物後追ふて、手を引かれたり負はれたり、裸人形を無理言ふて、買ふ

かんざし

て貰ふた簪かんざしの、透かしたらして甘やかし、可愛がられた親たちより、人が尋ねりや長さんが、たんといとしと言ふた時、やんがて女夫にならんしよと、乳母や丁稚になぶられて、恥かしかつた下心。定まり事とあきらめて、一緒に死んで下さんせ」

と、恋を立て抜く輪廻の絆、抱きつくづく顔と顔、男もとかう涙の縁、

「ともに沈まんこなたへ」

と、手に手を取りの声告げて、もはや桂に月のあし、

「アレ、アレ〜後に灯の光、見咎められぬその内に、いざや最期」

と諸共に、石を袂に糸と針、繻子の帯屋と信濃屋の、娘々と呼ぶ声に、見つけられじと足早に、転けつまるびつうしがせの、水上へとぞ、急ぎ行く。